
明日なき世界

ジャッカル東西田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日なき世界

【Nコード】

N5404Z

【作者名】

ジャッカル東西田

【あらすじ】

2012年12月 「世界崩壊」前夜

寒風吹き荒れる街のなか

赤提灯の灯るモツ鍋屋台には ただ二人のオトコたちだけが居た…

…

第一話（前書き）

自分の世界崩壊願望を書いてみました
多分こんな風にして世界は終わるはず！

よろしくお願いします

第一話

小さな屋台のカウンターに置かれたラジオからは前世紀の「戦争」をテーマにした曲が流れてきていた

時刻はすでに23時を過ぎている

12月の寒風吹きつける中、この様な吹きっ晒しの屋台に寄るのはよほどの「事情」のある者だけであろう

事実多くの者が自宅で家族とくつろぎ、たとえ最後の仕事を終えてから一杯やるにしても暖かいチェーン店の居酒屋などに赴いていた

どこか親しみを感じさせる年季のいった赤提灯が明るく灯る屋台店主であろう禿頭の男（つるりとした頭にタオルをねじり巻いている）は

「今日はこれ以上のアガリは見込めない」と考えているのか、カウンターの”内側”で石油ストーブに手を翳しながら呑気に新聞を読んでいる

そして、カウンターの”外側”では果たして「客」なのか否か……首に【マフラーだけ】を巻いた【全裸】の男が独り。古びた木目にだらりと頬を尽きほとんど空になったコップの酒を横眼で眺めていた

「マスターは……どうして逃げなかったんだい？」

唐突に、今までうずくまっていたマフラーの男は無気力に酒を眺めることにも飽きたのか顔を上げそう内側の男に尋ねた

マスターと呼ばれた男（タオルを頭に捻じっている）は、新聞に目を通したまま、さして変わった問でもないかのように淡々と応える

「まあ他にやることもありやせんですしね。嫁も娘も離れちまって守るモンも無いですし……地球が終わるったって何も今までやってきた何かが変わる訳じゃあねえんだ。だったらあんた、いつも通り此処でモツ作ってる方がよっぽど割に合ってますわ」

「奥さんと娘さんはどこに？」

「なに元嫁と娘ですがね。今は嫁の実家の方で世話になっとる筈ですわ」

「……」

男は個人情報に深入りしすぎたと感じたのか何も言わず、ただ目の前の安酒を空にした

今日は世界中の人々から、そう呼称よされた特別な一日であった

あるものは祈りを籠めて、あるものは疑惑うたがいを以て
人々は『今日』を呼称よんだ

半年前。地球に迫った小惑星群の存在が米国航空宇宙局（NASA）
から発表された時
人々は大した関心を持たなかった

それもそのはず

米国航空宇宙局は毎日のように同じような小惑星を観測し発表して
いたし、過去何度も地球にはその燃えカスー隕石ーが落ちてき
ていたからだ

「今回も逸れるなり外れるなり燃え尽きるなりするだろう」

と人々が気楽に考えたのは当然である

それは惑星群を観測した当事者、米国航空宇宙局でさえそうだった

だが……

三ヶ月前、人々の血相が変わった

「小惑星群はほぼ真つ直ぐに地球に向かって推進している。もしこ
のまま進路を変えることがなければ、大気圏に突入しても燃え尽き
る事なく直径4 kmから10 kmの隕石が地表に降り注ぐことにな
るだろう」

と米国航空宇宙局は発表した

そしてほぼ時を同じくして

イギリス、ドイツ、エジプト、インド、ロシア、英国、独逸、埃及、印度、露西亞、中国、日本
世界中の天文台でその事実が確認された

回避の可能性もほぼ0に近いことさえも……

このNEWSに世界が攪拌せいはんされた

自分だけは生き残ろうと富裕層は資源を買い漁った
社会に不満を持っていた者は犯罪に走った

宗教指導者は神の教えが唯一の滅びからの救済であると全人類に自
教への改宗（信仰）を迫った

それから戦争が起こった

国家、人種、民族、信教、体制、資源、金銭、権威、遺恨、暴力の
為の戦争

そのなかでも、何より度し難いのは宗教戦争だった

ユダヤ、キリスト、イスラム……

唯一神の宗教は己らの神を賭けて殺し合った

互いの神を殺す為に、より多くの信者を葬った

「世界は唯一神によって造られた。よって唯一神によってこの世界
は終焉を迎えねばならない」

そう宣言し神の名を冠した『核』ミサイルを配備しようとする過激
派も幾つか現れた

米国航空宇宙局（NASA）の発表からひと月経ち、死者が6億人を超えた頃

国際連合が介入した

「このままでは隕石で人類が滅びる前に、人間同士の戦争でなにもかも終わってしまう」

そういつて国連が出した案もまた狂った代物であつた……

それは

「隕石が落ちる一週間前に、国際連合が各国に『漏れ無く』核を打ち込むのでそれまでは戦争など止めて仲良くしましょう」というものである

だがこの案の議決後

信じ難いことに、世界は本当に「落ち着いて」しまったのだ

戦争も犯罪も不満も嘘のように影を潜め

ただ静かに【滅び】を待つことに成ったのである

隕石でも天変地異でも戦争でもない

人類自らが選択した【核による滅び】を……

第一話（後書き）

ありがとうございました

「世界が終わるのにチェーン店の居酒屋が営業してるわきゃあねえだろ？」

ごもつともです

世界崩壊の設定？世界観が矛盾しまくってます

「『E^イv^ウe』とか……ぶっ？」とか言わないで！

うーん

次話でなんとかしなくては……

第二話

コトコトと会話を喪った漢たちの代わりに釜の底が煮える音が静寂しじまのように再び屋台の場を治めていた

暫くして…

「マスター、鍋、ひとつ」

言葉を区切るようにして全裸にマフラーだけを巻いた客は肴を頼んだ

「へい！モツ一丁？」

店一杯に響き渡る声。禿頭の店主は威勢のよい声を上げると同時、手は既に流れるようにモツ鍋を作り始めていた

火にかけっぱなしの隣りの大釜から一人用の鍋に牛筋とスープを移し、新たに生の牛モツを投入して火を入れ直す

再び煮たってから、キャベツ・牛蒡・拉？とを加え強火で数分煮込む最後にこれでもかとニラを加えて一分足らずで火を止めて完成

この作業を男は――光る頭の男――は26年やって来た

風雨の夜も、雹の降る夜も、W杯の夜も、娘の誕生日の夜も、妻と離婚したその夜も……そして現在（世界の終わる日）ですら

「へい、お待ち」

ゴトリ。と全裸マフラーの前に置かれたモツ鍋にはそれだけの重みがあった

しかし、全裸にはそんなことはわからない。もともと空気を読めない男だ

「はふッ、ハフッ、あつ！」

などと独り。ただ美味そうにモツを、ニラを、麺を、鍋を喰らう

その様を見た店主は子どものような屈託のない、それでいてどこか安堵が混ざった人懐こい笑みを浮かべた

モツ鍋はかなり人を選ぶ食べ物である

好きな人は真夏でも欲するが、嫌いな人は一生嫌いなままでいることも多い

そのどちらもがモツ鍋の持つ「濃さ」に起因している

ならば、その「濃さ」をマイルドに（薄めて）しまえばよいというのはかなりの暴論である

くせもの
曲者であるこの「濃さ」こそがモツ鍋の本質だからだ

一見……モツ鍋は素材の強すぎる個性が互いを殺し合っているように思えるが、実際はそうではない

その泥臭さ（あく）、淫猥^{コウ}、情熱^{パッション}は何者にも殺害されることなく“味”の中で生き続けている

食材同士が互いの意思を継ぎ、鍋のなかでそれはひとつの越幾斯^{エキス}。否「意志」へと昇華される

くどい出汁^{スープ}、濃厚^こい野菜、噛^かみきれぬ内臓肉^{モツ}

それらをひとつの個性^{あじ}へと収束させるのが店主の腕の見せ所であった
故に彼は客が嬉しそうに自分のモツを喰^くべていると思わず微笑^{わら}んで
しまう

幾ばくかの時が流れた

「お客さんは今日お仕事だったんですかい？」
新聞を読み終えた店主は、目の前の変質者^{マスター}（よく観るとＴＶ局のデ
イレクターのようにマフラーをオサレ結びにしている）にそう問^とい
かけた

丁度^どメ（しめ）の老麵（替玉）を嚙^かつてた男は、その質問に激しく
噎^むせた
まさか世界の終わる日に仕事のことを訊かれるとは思わなかったの
だろう

ディレクター結びは箸を鍋の上に置くと
「言おうか言つまいか」
と気難^{アキラ}しげに悩む中尾彬のような貌^{かお}を造ったが、すぐにとつとつと
語り始めた

「マスター、俺ね……仕事してないんだ」
恥ずかしそうに、悔いるように、そう全裸は呟いた

「高校出て、地元の工場に就職して半年……仕事辞めて、すぐに自分の部屋に引きこもったんだ」

「……」

「15年……15年だよマスター。15年、同じ部屋に居た。達磨
みたいにさ、何をするわけでもなく。声を上げることもなく他人と
話すこともなくさ……」

「今日は俺の以前働いていた工場を見にいつてきたんだ。そりや世
界が明日滅びるんだから、誰もいなかったけどさ……懐かしかった
よ」

ずずずと顔を覆うようにして鍋の出汁を啜る

「それで今日は俺、全裸にコートとマフラーだけで来たんだ。工場
に誰かいたら脅かしてやろうと思ってさ。まあ街の方にも誰も居な
かったから、腹立ってコートは脱いじゃったけど……赤提灯が見え
たからさ。虫みたいに、暖かい赤色に、惹きつけられて……でも、
マスター驚いてもくんないからなあ」

男は戯けた様に落胆してみせた

実は、ここには仕事してた時に何回か来たことがあったんだけどね。
と付け加える

「……………」

店主はただ黙って『客』の話を聴いていた

第二話（後書き）

「もつ鍋回」です

モツの話ばかり？

あ、あと地味な会話とか……

一応「なぜ、世界の終末にも仕事（労働）をきちんとこなしている人々がいるのか？」という設定も入れてあったのですが、消しちゃいました？でへへへ

代わりにニート引きこもり（主人公）を登場させることで問題解決です

ええ、そうですね！

第三話

告白を終えた後

「マスターはさぞ呆れているだろう……」と全裸は俯いたまま顔を上げることが出来なかった

しかし…

「わたしはあなたのコトを良く憶えてますよ」

店主からかけられた思いもよらぬ言葉に全裸マフラーは、はっとして顔を上げる

店主はそれに気にせず続ける

「15年前の六月と、最後に来られたのが十月でしょう？」
当たってる！という顔で全裸はブンブンと頷いた

「すごい……どうして？」

一度でも来たことのある客の顔は全部憶えてますからと店主ははにかんで応えた

「緊急速報緊急速報」

ビロロロリピロロロリ。突如ラジオから流れた電子音が漢達の感傷を切り取った

「皆様方、番組の途中ですが失礼します。本日午前1時42分。国

際連合は日本に対して『核』を打ち込むことを明らかにしました。
ほぼ同時に欧州、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、アメリカ、オーストラリア……全世界各国に
『洩れなく』ひきがね引鉄が引かれるとのこと。もう一度繰り返します
……………」

「……………」

全裸が頷いたのはラジオからのNEWS（報せ）にはなかった
なんとはなしに屋台の内壁にある時計を眺める
針は既に1時を過ぎていた

「マスター、こつちきて飲まないか？」

その誘いは全裸の人生で一番自然と出た言葉であった
ひと他人との関係をつまく築くことの出来なかった裸の王様の……

「ご相伴に預かりやす」

店主はただそういつて屋号の入った紺の前掛けを外した

マスター

店主に酒をついで酒をつがれて

取り留めのない会話をした

家族の……

仕事の……

好みの女の……

そして、全裸は想うのだった

俺は、俺達は

泥のような今日を、恥辱に塗れた今日を生きている……

それでも

泥水を！糞袋を！恥辱を喰らいながら俺は、俺たちは

『明日』を

『世界』を待ち望んでいるのだと？

東の空が朱く染まった

漢達は空になった鍋を少し持ち上げてみる

「「おかわり」」

そう言って俺たちは笑った

第三話（後書き）

ありがとうございました

有名な格言で

「世界はドカン！と終わるのではなくめそめそ……と終わるだろう」というのが有りますが、自分もその通りだと思っています

作内ではある意味「ドカンっ！」と核ミサイルで終わるわけですが、まあそこはそれ
来年は果たしてどうなることやら……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5404z/>

明日なき世界

2011年12月21日19時51分発行